

17) 外傷性心室中隔欠損の治療経験

金沢 宏・羽賀 学(新潟市民病院)
 中澤 聡・山崎 芳彦(心臓血管外科)
 三井田 博・廣瀬 保夫(同救命救急センター)

17才男性。バイク運転中、田に転落し受傷。高度の両側肺挫傷の診断で搬入された。呼吸不全がひどくPCPSを5日間、人工呼吸管理を27日間行った。受傷17日頃から収縮期心雑音を聴取されるようになり、心エコーで心室中隔欠損の存在を確認した。心臓カテーテル検査では、 $Qp/Qs \approx 2$ の短絡を認めた。受傷44日、体外循環下に左室心尖部切開及び右室切開で心室中隔欠損パッチ閉鎖術を施行した。経過は良好であった。心室中隔欠損の閉鎖に際し、TEEはその位置確認に有効な手段であった。

18) PCPS と CHF (持続血液濾過) が有効であった緊急冠動脈バイパス術の1救命例

目黒 昌・長谷川 豊(新潟こばり病院)
 斉藤 憲・丸山 行夫(心臓血管外科)
 大関 一(新潟大学 第二外科)
 江口 昭治(新潟心臓血管医学財団)

69歳男性。急性心筋梗塞の診断にて左冠動脈前下行枝にPTCAが試みられたが不成功に終わり、当科で大伏在静脈による緊急冠動脈バイパス術(1枝)を施行した。術直後より重症LOSとなりPCPSを開始した。腎機能障害も認めCHFを開始した。心機能は2日より改善し、3病日にPCPSから離脱した。腎機能も徐々に改善し9病日にCHFから離脱した。以後経過は概ね良好で、術後造影でバイパスグラフトの開存を確認したのち退院した。

19) 肝内胆管嚢胞腺腫の1切除例

葛 仁猛・大橋 泰博
 多田 哲也(立川綜合病院外科)
 藪崎 裕(県立がんセンター 新潟病院外科)

症例は60歳、男性。四肢浮腫、振戦を主訴に当院を受診。USにて肝臓に嚢胞性病変、又肝胆道系酵素の上昇があり、入院精査を行った。US, CT, MRCPにて肝S₂₋₄に約3cm大の多房性嚢胞性病変、肝内胆管の拡張を認めた。PTCにて壁の一部に不整を呈する孤立

性嚢胞病変を認めた。画像診断では確定診断に至らずも、腫瘍マーカーの上昇もあり、悪性腫瘍を疑い、肝左葉切除術を施行した。病理組織学的に嚢胞壁は異型に乏しい円柱上皮から成り、紡錘型細胞に富む間質を認め、肝内胆管嚢胞腺腫と診断された。

本疾患は嚢胞腺腫との鑑別が難しく、嚢胞腺腫の発生源母地といわれており、手術的に切除することが望ましいと考えられる。

20) 膵腺扁平上皮癌の1例

阿部 要一・山田 明
 安齋 裕・岸本 浩史(木戸病院外科)

膵癌のなかで、比較的多くとされている膵腺扁平上皮癌の1切除例を経験した。症例は77歳、女性、健診時の超音波検査にて胆嚢結石を指摘され、腹痛にて入院した。入院時、貧血、黄疸は無く、CT, MRIにて膵頭部の鉤状突起部に径5cm大の腫瘤が発見され、造影CTにて腫瘍辺縁がenhanceされた。ERCPにて主膵管が膵頭部にて狭窄し、総胆管も同部位にて全周性のsmoothな狭窄を示した。血管造影では、腫瘍辺縁部の僅かな血管増生を認め、SMV, Splenic veinは右後方より圧排されていた。CEAは5.4ng/ml, CA19-9は58.8IU/lと軽度上昇していた。膵頭部癌の診断にて、膵頭十二指腸切除術を施行した。術後7カ月の現在生存中であるが、術後1カ月半のCTにてすでに肝転移の所見を認めた。

21) 門脈狭窄を伴う慢性膵炎に有効であった Frey 手術の1経験例

津田 祐子・霜田 光義
 坂東 正・長田 拓哉
 横山 義信・竹森 繁(富山医科薬科大学 第二外科)
 坂本 隆・塚田 一博

慢性膵炎に対する手術治療において、Frey手術は除痛のみならず膵機能温存や膵頭部のドレナージ効果、胆管狭窄の解除の点で優れた術式であるといわれている。今回、膵病変、胆管狭窄に加え、門脈狭窄の見られた慢性膵炎に対し、Frey手術を施行し、良好な成績を得たので報告する。

患者は34歳、男性。US, CTでは膵管のびまん性の拡張と膵石、膵頭部の嚢胞形成、ERCPでは不整な膵管拡張と膵内胆管の狭窄、血管造影では膵頭部に一致した門脈狭窄、及び胃大網静脈、脾静脈を介した側副路を